

[巻頭言]

意外かも？事務局の仕事－学会を世界につなぐお手伝い－

情報システム学会事務局長，専修大学名誉教授

魚田 勝臣

多くの学会と同様，情報システム学会も大学の研究室を拠点に産声を上げました。2005年2月頃から，新潟国際情報大学の竹並輝之研究室において，先生と学生たちで運営が始まりました。創始者である浦昭二先生の要請もあって2008年10月，東京千代田区四番町（市ヶ谷）に拠点を移しました。移転とともに，私は総務委員長ないし事務局長を仰せつかって現在に至っております。

■事務局の仕事

事務局の仕事には，会計管理，財務管理，会員管理，事務管理および文書管理があります。学会の情報が多く集まるところでもあります。

後発の学会ですし，浦先生の方針もあって，会費等をできるだけ低廉にするために，経費を極力抑えております。事務局では，他者のオフィスの間借りすること，常雇いの職員を置かずパートタイマーとすることおよび印刷物をできるだけ作らないことの3点を重点施策としています。

これらの仕事を，監事；松平和也氏の骨折りで，移転先の（株）ヴィジ社のパートタイマーの方に業務委託し，二人で運営を始めました。企業経営の経験のない私は，元大手ネットワーク会社社長の理事；岩崎慎一氏の全面的な支援をうけて，諸業務の基盤を固めることができました。また，ネットワークなどの基盤整備は委員長理事；飯島正先生の尽力がありました。

しかし，発足当時は学会全体の態勢が固まっていないため，本来業務以外で，引き受け手のない案件はすべて事務局の仕事になっていました。諸案件を振り返ってみると，学会を公認団体にするのと情報発信を通じて世界につなぐことに総括できそう

です。以下順に述べます。

■学会公認の手続き

公に認められた学会にするために，日本学術会議からの認定と一般社団法人として認可される手続きをとりました。

(1) 日本学術会議認定の学術研究団体としての認定（2017年11月）

日本学術会議に申請して『協力学術研究団体』として認定を受けることができました。われわれのような中規模の学会が認定されたのは，比較的早かったと自負しています。その後に申請した学会で審査に時間を要したという話もありますので，早期の手配が功を奏したかもしれません。

(2) 任意団体から一般社団法人へ（2010年7月）

当学会は発足当時，法人格を持たない任意団体でした。そのため，銀行口座を開くときも代表者の個人名で行っていました。定款や諸規定などを整備して，一般社団法人となりました。遂行の裏には，前記飯島正先生と司法書士の資格を持つ監事；田沼浩氏など多くの方の尽力がありました。

■世界に通じる情報発信基地の確立

当学会が発信する情報には，学会誌（機関紙），発刊書籍，メールマガジン，全国大会・研究発表大会の論文，シンポジウムでの講演記録，研究会の発表資料や討論の記録などがあります。これらの成果は貴重で，学会内部に留めるべきではなく国内および世界に発信する必要があります。

(1) 学会誌の ISSN 取得（2009年9月）

ISSN (International Standard Serial Number: 国際標準逐次刊行物番号) は，大

学の紀要や学術論文などの逐次刊行物を識別するための国際的なコードです。ISSNは個々の逐次刊行物と1対1で結びつく固有の番号で、世界規模で使用されています。当学会の機関誌にはISSN1884-2135が割り当てられています。

(2) 学会発刊書籍のISBN取得(2010年7月)と国会図書館への納付

ISBN (International Standard Book Number) は、世界共通で、図書(書籍)を特定するための番号です。日本語では国際標準図書番号と訳しています。当学会はISBN 978-4-905112-xx (xxは01から99, 事務局で管理) を取得していて、刊行書籍にこの番号を割り振っています。これによって、世界から書籍が識別できます。さらに発刊書籍は、事務局から2冊国会図書館へ無償で納付しています。これによって、東京と京都の国会図書館で閲覧可能になっているだけでなく、日本国が存在する限り永久に保管されます。著者にとって大変名誉なことと思います。

(3) 学会誌のJ-Stageへの登録による世界へつなぐ情報発信

学会誌に掲載された論文や記事などが、世界から参照可能になれば、研究者だけでなく、実務家としても市民としても好ましいことです。このことは学会の願望でもありました。文部科学省の一機関であるJ-Stageがこの仕組み(プラットフォーム)を提供していて、当学会で編集委員会が発刊した学会誌を事務局が3か月後公開になった時点でJ-Stageにオンラインジャーナルとしてアップしています。3か月間は会員のみ参照できるようにして、その後は世界から無料でダウンロードできるようにするためです。このようなことが可能になるのは、J-Stageが世界の学術誌のプラットフォームと連携しているためです。加入当初は登録時以降号に限られていたものが、事務局篠田さんの地道な努力により、現在では既刊号すべてが世界から参照可能になっています。論文等のコピーを有料にしている学会が多い中、当学会は、より開かれた学会であると誇って良いのではないのでしょうか。

実は、J-Stageへの学会誌登録の必要性は古くから認識されていて、事務局でも早くから取り組んだものの、掲載論文が少ないことを理由に2度選外となり、3度目の申請で認可されたものです。このときは大変嬉しく快哉を叫んだほどでした。また、本件には編集委員長の理事；石井先生のご協力を得ました。

■発展し永続する学会へ

自動応答が増えている時代にあって、できうれば人の温もりの感じられる事務局でありたいと考えています。

以上紹介しましたように世界に開かれた情報発信基地としての準備は整いました。あとは会員の皆様がこの仕組みを活用すべく、学会誌に論文や記事を寄稿するようお願いするのみです。新しく編集委員長に就任された理事；大曾根匡先生は論文が多く寄稿掲載されるように、これまで以上に熱心に取り組んでおられます。その成果に期待を寄せるものです。

事務局では、学会誌に続いて、大会論文集やメールマガジンについても順次J-Stageに登録して、世界から入手可能にしたいと考えています。そうすることによって、大会にもメールマガジンにも参加者が増えて、学会活動がますます活性化すると考えています。

翻って、現在はAIとかIoTとかが話題になり、私にはますます人間が情報社会から疎外されていくように思えてなりません。哲学者：今道友信先生は効率や効果だけで物事を判断するのではなく、立派かどうかという尺度を持たねばならないと指摘されました。当学会が標榜する人間中心の情報システムはこれと軌を一にするものと考えます。

学会は論文や記事を、西垣通先生；基礎情報学での『機械情報』として発信する組織ではありません。それに至るまでに人と人との出会いや議論など『生命情報』や『社会情報』を交歓する場でもあります。これを日本では『ご縁』と称しているのではないのでしょうか。ご縁をつなぐお手伝い、それも事務局の大事な仕事であり、人間中心の思想を広めるために必要不可欠なことと考えています。

皆様のご批判やお考えを拝聴いたしたく、
宜しく願いいたします。

著者略歴

魚田 勝臣（うおた かつおみ）

三菱電機株式会社，慶應義塾大学兼任講師
を経て，1989 年より専修大学教授，2005
年情報システム学会理事・総務委員長，2009
年定年により専修大学退任，同年名誉教授，
現在に至る。